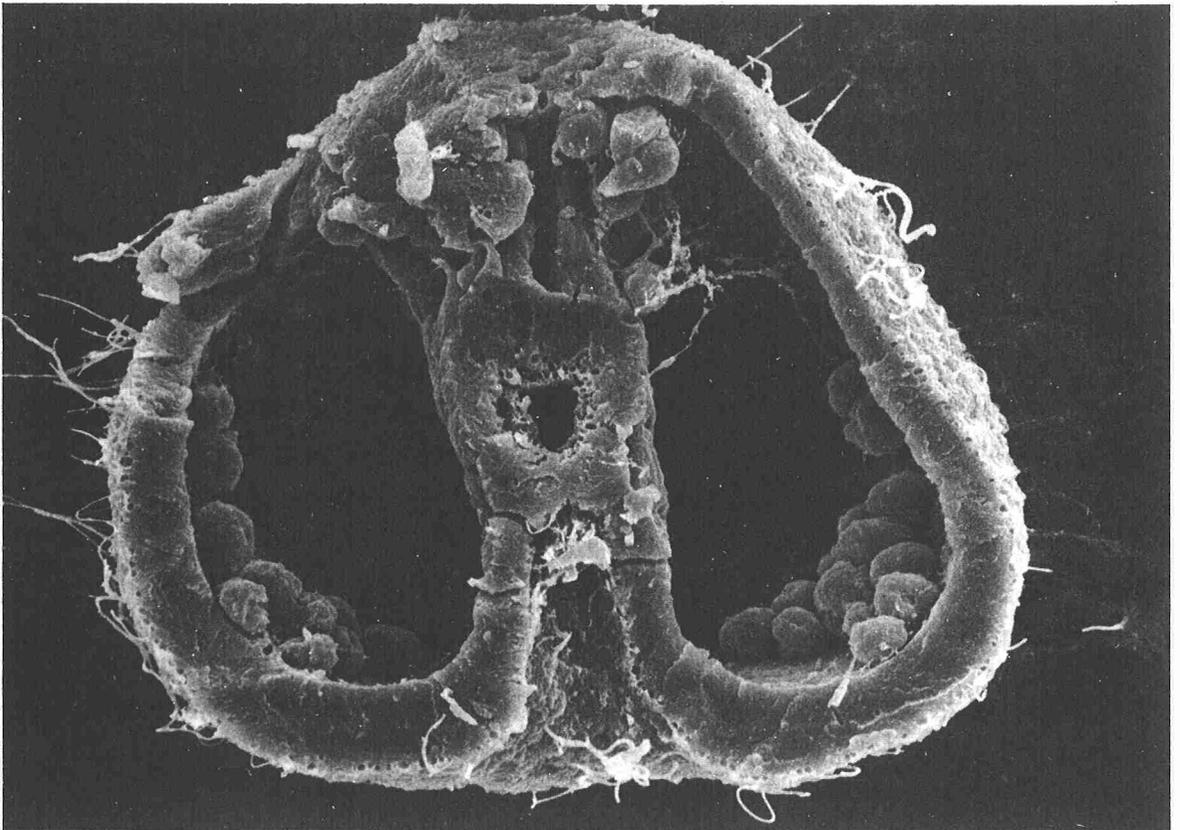


# 廣報

東京大学理学部

ウニの囊胚



## 目次

表紙の説明	木下清一郎	1
物理学教室への着任にあたって	塚田 捷	2
アファーマティブ・アクション、 我が国に独創的研究を発展させる 環境を創成する方策について	飯田修一	3
<学部消息>		5

## 表紙の説明

### ウニの囊胚

私達のからだは、非常に複雑にみえますが、結局のところ、外側を包んでいる外皮と、中を貫いている消化管という管と、その中間をうめているつめものから成りたっています。(神経系は外皮の派生物とみます。)これは、すべての多細胞動物について、共通していえることです。

一個の卵から動物のからだをつくられていくとき、この基本的な形がはじめてあらわれるのは囊胚とよばれる時期で、動物の基本構造が最初につくられます。

写真は、発生学で非常によく使われるウニ(こゝではバフソウニ)のばあいでは、囊胚を半分に分けて、走査電顕でみたところです。胚は中空のボール状になったのち、中央の腔所に向って管を貫通させようとしています。このときには、先ぶれの細胞がまず腔所にこぼれおちて足場をつくったり、管の先端では管を天井へ引き上げる細胞がはたらいていたり、管自身(これが将来消化管となります)も流れこみ運動をするなど、それぞれ、めざましい細胞の運動がみられます。ところが、これらの細胞運動の機構は、どれ一つとっても完全には理解されておらず、発生学者の挑戦をはねつけています。

この写真は、臨海実験所の雨宮昭南君が考案された方法によって胚を割り、囊胚の内部をのぞきこんだもので、こういう視点から電顕で胚内部がみられたのははじめてです。胚細胞が運動してある形をつくり上げるときには、細胞表面の構造などが重要な意味をもつので、この方法は今後非常に役立つものと期待されます。

この仕事については、前所長の寺山宏教授、動物学教室の赤坂甲治君とともに共著論文で発表しておられていますが、広報のために雨宮君に特に乞うて未発表の写真をいただきましたことを申し添えます。

臨海実験所

木下清一郎

## 物理学教室への着任にあたって

塚田 捷 (物理)

この1月、5年間を過ぎた分子科学研究所から、古巣の理学部物理学教室に戻ってまいりました。学部や大学院で教えを受けた偉い先生方も多く、しきいが高いような気持でしたが、私と同年輩の先生方もかなりおられて、5年という着実な時の流れを身に泌みて感じております。着任したときは厳寒の時期でしたが、いろいろの行事や雑用でとまどったり、締切の迫った原稿で追われたりしているうち、いつの間にか初夏になってしまいました。

私にとって分子科学研究所で送った研究生生活の印象は、あまりにも強いものがあります。これを大学での研究や教育のあり方と比べると、いろいろの感想がわいてまいります。一般に研究所では比較的絞られた研究目標をめざして、最先端の研究を集散的に推進する様になっている訳で、このため研究経費や設備など研究条件の配慮が格段になされていると言えると思います。分子科学研究所はその一つの典型であります。研究者個人の生活からみても、まったく研究活動に没頭できる環境に恵まれている様に思います。例えばあまりにも雑多な情報洪水におかされた大都会からは隔たった位置にある事も、一つのメリットと言えるでしょうし、歩いて20分程の場所に宿舍があり、夕食後も研究所にでかけ仕事を続けられる事なども、大層好都合なものです。

ところでこの様に理想的な研究所のデメリットを強いてあげれば、研究分野や研究者の興味が均質化される傾向がある事ではないかと思えます。また研究課題がしばしば、目的指向的で短期的な視野から選ばれる様になり、強い学問的な好奇心に動機づけられる研究とか、体系的な必然性に

ぞす研究ができにくくなる危険がないとは言えません。これは研究所の使命からして、ある意味で致し方ないとも言えますが、基礎科学の発展・深化という立場からみると必ずしも望ましい事ではありません。

私は研究所とはまったく異なった性格をもつものとして、大学の魅力をこゝに感じます。すなわち多様な分野の研究者が互いに交流する事ができ、それによって細分化されすぎた自己の専門領域の成果を広い視野からとらえなおす余裕が生じると思えます。この様な余裕が長期的にみれば、革新的な科学・技術の発展を導く活力の源になるのではないのでしょうか。学生や若手研究者の教育・育成が大学の最も重要な使命の一つである事について、多言を弄するつもりはありませんが、大学での研究にとっても教育を通して得る所が多いと感じております。これは新しい研究分野を学生諸君に教育する過程で研究成果をあらゆる角度から批判的に、そして体系的に再構成する事が要求されるからだと思えます。また学生や若手研究者と共に謙虚に第一歩から考えて行く事により、意外に重要な着想がわいたりする事もあります。この様に考えると大学と研究所の役割は相補的な面があって良いように思えます。従って共同研究や活潑な人事交流によって、両者が有機的に協力関係を保つ事が大事ではないかと考えております。

残されたスペースで、私の専門である固体表面の物性理論の事について述べる事にいたしました。この分野は物理と化学の境界領域であり、また多方面にわたる応用技術の基礎を支える重要な役割を果すものであります。精密科学としての研究はごく最近スタートしたにすぎません。実際

5年前、分子科学研究所に赴任した時は国内でこれに真面目にとり組む理論研究者は皆無といって良く、また実験面でも欧米に比べた立遅れが感ぜられておりました。しかし、その後日本物理学会に表面・界面分科が新設された事などにもみられる様に、着実にこの分野の研究者の層が厚くなりつつある事は、大層喜ばしい事であります。たゞし現状については、おびたゞしい実験データが続

々と報告されるはなばなしさに圧倒されて、質的な飛躍をめざす野心的な研究が乏しかった様に感じております。私はこうした反省をふまえて、研究所から大学へ移った好機に、表面・界面に特有な諸現象の謎を解くべく、腰をおちつけた研究を始めたいと思っております。先輩諸先生との交流や、学生・若手諸氏との協力作業からもインスピレーションが得られる事を期待しております。

## アファーマティヴ・アクション、我が国に独創的研究を発展させる環境を創成する方策に就いて

飯田 修一 (物理)

米国が、その人種問題を如何に解決するかは、筆者の関心の一つである。昨年末訪米して、若い人達に関する限り、多くの分野にマイノリティ(少数劣勢派)の人達が、潑刺として参加し、米国民としての権利を平等に行使し始めているように思えた。従ってその差別是正政策の内容を知りたいと希望した。その結果判ったことは、1964年公民権法制定後、その俚何もしないでいると、普通に認められている慣習、方法、処置(accepted policies and procedures)に従って、実際上何の変化も起らず、平等雇用が実現されないことであつた。そこでジョンソン大統領は1965年9月、連邦政府と契約している機関は、その雇用人員が、その人種、信仰・信条(Creed)、皮膚の色、原国籍に影響されることなく雇用されることを保証するアファーマティヴ・アクション(Affirmative Action)を取らねばならぬことを要求する行政命令を出した。アファーマティヴ・アクションの直訳は“確認する行為”であらう。しかしこうしてアファーマティヴ・アクションの第一段階が始まり、その後、アファーマティヴ・アクションの原則を敷衍する一連の米国最高裁判所判決が続いて、差別是正に関する政策、行為、判決の

すべてがアファーマティヴ・アクションと呼ばれることになった。たとえば、最低必要条件を満足する限り、知性テストなどの方法で、マイノリティの人達の雇用を結果的に制限することは違法と判決された。また1972年には、教育、とくに高等教育の機会均等が、差別是正に欠かせない条件であることが認められ、入学者選衡についてもアファーマティヴ・アクションが要求され、実行された。マイノリティの定義は拡張され、人種差の他、男女の性差、年令差なども追加された。

さて、福井謙一教授のノーベル賞受賞と関係して、京都と東京の学風の相違が話題となったが、欧米よりの輸入により育成されたわが国の科学に、独創的研究を発展させる上でアファーマティヴ・アクションが必要であると筆者は考える。東北大学の、半導体研究所所長西沢潤一教授は、助手としての苦斗時代に、半導体の実験と理論に関するその独創的研究論文が、わが国の学会で受諾されず、研究室の評判を落さないためという理由で、恩師より論文提出の差し止めを言い渡され、精神的窮地に陥いたと述べて居られる。<sup>\*</sup> 八木アンテナの八木教授も、学会誌がその方向に偏向するという理由で、学会から論文提出の差し控えが要請さ

れたと聞いている。<sup>\*</sup> 問題の性質上、当事者以外の人達が問題提起を行う可能性がなく、従って自身のことを述べねばならぬ点、甚だ恐縮であるが、筆者も、電子を永久電流と見做す新しい電子の古典モデルを発見し、また磁場のもつ磁気エネルギーを正しく考慮することにより、新しい電磁気学の統一体系を建設した。さらにその結果、量子物理学と古典物理学の厳密な接続関係を明らかにして、物質物理学の新体系を提唱するに至ったが、〔概要は Proc. ICF 3 (1981) P. 141.〕その新しい理論体系に関する一連の論文が、六年以上に亘って、我が国の学会誌の受諾するところにならないという事態が、継続している。そして昨年12月28日、米国の Phys. Rev. Letters に、米国人により、筆者の重要な結論の一つ〔マイスナー効果の古典物理学的導出〕と、極めて類似した題名のもとに、筆者の見地からは不十分で、熱平衡及び境界面の考慮のない論理体系にも拘らず、同上の文章を明記した論文が公表されるに至った。筆者の未公表論文の別刷は1975年以来海外に出されて居り、上記著者はその内容を知っていると筆者は予想するが、引用されてはいないのである。

わが国において、公表出来ない理由は、既存の物理学の根底、とくに熱統計力学の基礎に若干の変更を要求する点にあると考える。この場合マジョリティ（多数優勢派）は、こうした、時の常識を変更する論文の公表に賛成でないのであって、従って放っておくと、独創的研究者はマイノリティとして、研究は公表できず、研究費その他も冷遇され、物質的・精神的窮地に陥ち入り、場合により自殺といった状況にすら追い込まれて、国民や人類の永い眼で見た利益が、侵害されてゆく。世界の科学史は、こうした状況の事例で充されると言っても過言ではないことが注意される。

これらの場合、米国の差別問題と同様、関係専門分野の人達の、単純な多数決原理の適用では、問題が解決しないところに、課題の困難性がある。筆者は、こうした場合に関して、日本学術会議か、

文部省か、議会か、あるいは世論が、“アフターマティブ・アクション”を取り、「自然科学の論文として矛盾のない論理体系であって、既存の実験事実と相反せず、さらにその当否の決定が、実験その他の客観的手段により、現時点では直ちに明らかにすることが出来ないとしても、将来可能となる状況に発展する可能性を持つという条件を具えているならば、討議に値し、論争に発展している論文として、公表の方向で検討しなければならない。」とする慣行の確認を、オリジナルな研究論文発表誌を持つわが国の全学協会に要請することを希望する。過去の範例に従えば、研究が独創的で且つ重要であればある程、影響する範囲が大きく、抵抗が激しくなるのであって、島国として、権威の相対的比較に敏感なわが国では、この問題は特に重要と判断する。この事は、わが国に独創的研究を育成し、発展させ、外国の人達から、日本人は模倣だけが上手な国民で、模倣に専念してお金儲けだけを行うと蔑まれないために、絶対に欠かせない条件の一つであることを、こゝに強く主張させて載く。

今一例として、アインシュタインの相対性理論は、当初難解であって、理解出来た人は稀であり、もちろん容易に決定的と判断できる実験的証拠もなく、多くの反対に包まれ、とくに時の哲学の権威ベルグソンは、猛烈に反対し、ノーベル物理学賞委員会は、相対性理論でアインシュタインに賞を与える決定を行うことが出来ず、その光電効果の理論に対してノーベル賞を決定するが、アインシュタインのノーベル賞受賞講演は相対性理論の説明に終始し、光電効果には一言も言及しなかったという有名な話が残っている。ただし、アインシュタインの相対性理論の論文は、すぐに発表されて居り、従ってその公表自体には問題がなかったように思われる点は大事なところである。

<sup>\*</sup> 西沢潤一、猿賀俊文：“斗う独創技術”，日刊工業新聞社、昭和56年、139頁。（投稿）

《学部消息》

教授会メモ

5月19日(水)定例教授会

理学部4号館 1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認  
 (2) 人事異動等報告  
 (3) 寄附の受入れについて  
 (4) 人事委員会報告  
 (5) 会計委員会報告  
 (6) 教務委員会報告  
 (7) その他

6月16日(水)定例教授会

理学部4号館 1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認  
 (2) 人事異動等報告  
 (3) 寄附の受入れについて  
 (4) 人事委員会報告  
 (5) 会計委員会報告  
 (6) 教務委員会報告  
 (7) 企画委員会報告  
 (8) 入試制度について  
 (9) その他

〔次回以降予定:〕

7月14日(水)13時30分より

8月 休 会

9月8日(水)13時30分より

本学部委員会委員等名簿抄 (順不同)

昭和 57. 6. 1 現在

委員会等の名称	氏 名(所属)・〔○印は長〕	備 考
企 画 委 員 会	○西島(物), 田丸(化), 田村(数) 飯野(植), 海野(天), 飯山(質) 有馬(物), 大木(化), 佐々木(物) 〔山崎(物)〕	
人 事 委 員 会	宮沢(物), 宮沢(生), 高倉(天) ○久城(質), 大木(化), 安楽(植)	
会 計 委 員 会	小嶋(球), 宮本(物), 藤田(数) ○後藤(情), 酒井(生), 埴原(人)	
教 務 委 員 会	井上(生), 高橋(動), 武田(鉦) ○飯田(物), 佐藤(情), 尾崎(天) 落合(数), 〔飯山(質)〕	

委員会等の名称	氏 名(所属)・〔○印は長〕	備 考
広 報 委 員 会	○露木(化), 尾本(人), 松野(球) 飯高(数), 矢崎(物)	
学 生 委 員	有馬(物)	
紀 要 委 員 会	○藤田(数), 花井(質), 高橋(動) 埴原(人), 岩槻(園)	
環 境 安 全 委 員 会	○稲本(化), 飯田(物), 佐藤(人) 武田(鉦), 井上(生)	
放 射 線 管 理 委 員 会	○富永(化), 中井(物), 駒嶺(植) 大野(生), 脇田(殻), 小橋(化)	
組換えDNA実験安全委員会	○和田昭(物), 岡田(生), 鈴木秀(物) 富永(化), 堀田(物)	
発 明 委 員 会	○不破(化), 山田(情), 山崎(物) 露木(化), 酒井(生), 久城(質) 田村(事)	
百 年 史 編 集 委 員 会	○飯田(物), 伊藤(数), 堀(天) 佐藤(球), 田隅(化), 溝淵(生) 水野(動), 佐藤(植), 遠藤(人) 花井(質), 武田(鉦), 小堀(理) 後藤(情), 重井(臨海), ※〔大場(園)〕 福島(施), 田村(事)	※ 総合研究資料館
視 聴 覚 小 委 員 会	高橋(動)	
図 書 委 員 会	○岩堀(数), 橋本英(物), 榎本(情) 吉村(天), 斉藤(球), 佐佐木(化) 荒田(生), 代谷(動), 笠原(植) 尾本(人), 鎮西(質), 鈴木(理)	
素粒子物理学国際協力 施設運営協議会	江上(動), 海野(天), 田村(数) 山口(物), 鈴木秀(物), 佐々木(物) 小柴(物)	西川(高工研)
素粒子物理学国際協力 施設運営委員会	山口(物), 藤井(物), 山崎(物) 鈴木秀(物), 佐々木(物), 山本(物) 釜江(物) 折戸(物), 戸塚(素) 山田(素)	

委員会等の名称	氏名(所属)・〔○印は長〕	備考
中間子科学実験施設 運営協議会	○江上(動), 田村(数), 海野(天) 鈴木秀(物), 宮沢(物), 山崎(物)	西川(高エ研)
中間子科学実験施設 運営委員会	○宮沢(物), 山崎(物), 鈴木秀(物) 小柴(物), 佐々木(物), 藤井(物) 中井(物), 釜江(物), 山本(物) 折戸(物), 永宮(物), 近藤(化) 永嶺(中),	
分光化学センター 運営委員会	○黒田(化), 竹内(鉱), 古谷(植) 和田昭(物), 田隅(化), 不破(化) 稲本(化), 宮沢(生)	

## 人事異動報告

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	教授	井野正三	57. 6. 1	昇任	東北大学 金属材料研究所 助教授より
地物	講師	松浦充宏	57. 6. 1	昇任	地球物理学科 助手より
地理	教授	鈴木秀夫	57. 6. 16	昇任	地理学教室 助教授より

(職員)

地物	技官	榎本邦明	57. 6. 1	配置換	物理学科より
----	----	------	----------	-----	--------

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

## 外国人客員研究員報告

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究期間	備考
物理	有馬教授	ブラジル	CHRISTIAN HSI-TSENG CHEN	サンパウロ大学 助教授	57. 5. 19 } 58. 2. 28	ブラジル FAPESP
物理	有馬教授	イタリア	Iachello, F	エール大学 教授	57. 7. 3 } 57. 7. 31	日本学術振興会 外国人招へい研 究者
化学	近藤助教授	アメリカ	W. C. Stwalley	アイオワ大学 教授	57. 5. 29 } 57. 7. 22	同上
化学	大木教授	アメリカ	Otto T. Benfey	ギルフォード大 学 教授	57. 6. 1 } 57. 7. 5	私費研究
天文	高倉教授	インド	S. S. DEGAONKAR	インド国立物理 研究所 助教授	57. 5. 12 } 58. 3. 31	日本学術振興会 外国人招へい研 究者
化学	向山教授	中華人民 共和国	黄 化 民	吉林大学 教授	57. 8. 1 } 58. 1. 31	中国政府派遣
地物	岸保教授	インド	Lakkimsetti Krishna Murty	インド気象台 上級予報官	57. 9. 1 } 57. 11. 29	日本国際教育協 会 帰国外国人留学 生

## 海外渡航者

( 5 月 )

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	助教授	奈良坂 紘一	アメリカ合衆国, カナダ	5. 22~6. 6	マクロライド合成シンポジウム出席及び有機合成化学に関する調査研究のため
物理	教授	西島 和彦	ドイツ連邦共和 国	5. 2~8. 3	場の理論に関する研究連絡のため
地物	助教授	松野 太郎	アメリカ合衆国, カナダ	5. 10~5. 30	中層大気観測計画予備研究・研究会及び太陽地球間物理シンポジウム出席のため
臨海	助手	雨宮 昭南	アメリカ合衆国	5. 5~5. 27	太平洋産ウニ類の比較発生と精子の比較形態の研究のため
天文	助教授	小平 桂一	カナダ	5. 19~5. 24	「宇宙空間天文学のための先進技術」に関するシンポジウム出席のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地質	教授	飯山敏道	大韓民国	5. 11～5. 31	鉱床学に関する研究連絡のため
物理	助教授	中井浩二	ドイツ連邦共和国	5. 4～5. 19	高エネルギー原子核反応と原子核のクオーク構成子の構造に関する研究のため
物理	助教授	永宮正治	ドイツ連邦共和国	5. 7～5. 17	高エネルギー原子核反応と原子核のクオーク構成子の構造に関する研究のため
地質	助手	浦辺徹郎	アメリカ合衆国, メキシコ, カナダ	5. 24～10.23	メキシコ国の火山鉱物に関する研究調査のため
化学	助手	梅澤喜夫	カナダ, アメリカ合衆国	5. 8～5. 30	アメリカ電気化学協会 161回大会, 電気化学日米セミナー出席及び分析化学に関する研究討議のため
地物研	教授	福島直	カナダ, アメリカ合衆国	5. 14～6. 4	国際地球電磁気学・超高層大気物理学協会執行委員会出席並に地球電磁気学に関する研究連絡のため
植物	教授	古谷雅樹	大韓民国	5. 26～5. 30	光生物学に関する国際ワークショップ出席のため
天文	教授	高倉達雄	カナダ	5. 17～5. 22	日米太陽共同研究打合せ及び太陽極大観測年計画 (SMY) 会議出席のため
化学	教授	田丸謙二	アメリカ合衆国	5. 25～5. 31	化学反応学に関する調査研究のため
天文	助教授	尾崎洋二	アメリカ合衆国	5. 30～6. 7	「古典的変光星及び激変星における脈動」研究集会出席のため
数学	教授	藤田宏	フィリピン	5. 30～6. 10	応用解析に関する研究のため

( 6 月 )

植物	助手	佐藤直樹	オランダ	6. 3～6.14	植物脂質の生化学及び代謝に関する第5回国際シンポジウム出席のため
化学	助手	薬師久弥	アメリカ合衆国	6. 1～58. 5. 31	導伝性高分子に関する研究のため
数学	助手	加藤信一	フランス, ドイツ連邦共和国	6. 8～6.30	代数群に関する研究集会出席及び代数群に関する研究連絡のため
化学	教授	富永健	アメリカ合衆国	6. 21～7. 6	第11回国際ホットアトム化学シンポジウム, 日米セミナー出席及び放射化学に関する研究連絡のため
化学	教授	向山光昭	アメリカ合衆国	6. 22～7. 3	ゴードンコンファレンス出席及び有機合成化学に関する研究連絡のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	教授	猪木 慶治	ドイツ連邦共和国, フランス, 連合王国	6. 19~8. 17	第21回高エネルギー物理学国際会議出席及び高エネルギー物理学に関する研究連絡のため
物理	助教授	一丸 節夫	スウェーデン	6. 7~6. 21	1982プラズマ物理国際会議及びプラズマ物理チャルマース・シンポジウム出席のため
情報	教授	国井 利泰	アメリカ合衆国	6. 12~7. 2	コンピュータ・グラフィックスに関する調査研究のため
分光	助教授	齋藤 太郎	中華人民共和国	6. 13~6. 25	第2回無機化学及び有機金属化学中日米セミナー出席及び無機合成化学に関する研究連絡のため
地質	教授	久城 育夫	ソビエト連邦	6. 1~6. 11	高温・高圧下における実験及び岩石学的応用研究の実施のため
物理	助教授	永宮 正治	オランダ, ソビエト連邦	6. 5~6. 17	第13回多重発生国際シンポジウム出席及び原子核実験に関する研究連絡のため
地物	助手	金沢 敏彦	アメリカ合衆国	6. 26~7. 4	1982年海底地震計の開発技術に関する研究集会出席のため
物理	教授	山崎 敏光	ハンガリー, スイス, ドイツ連邦共和国	6. 6~6. 27	ニュートリノ国際会議出席及び原子核物理学に関する研究連絡のため
生化	教授	宮沢 辰雄	イタリア	6. 18~6. 28	ペプチド・ポリペプチド・タンパク質の相互作用と生物的意義についての国際シンポジウム出席のため
物理	教授	和田 昭允	イタリア, エジプト	6. 15~7. 1	ペプチド・ポリペプチド・蛋白質に関する国際会議出席及び生物物理学に関する研究連絡のため
物理	助教授	小林 孝嘉	ドイツ連邦共和国, フランス	6. 14~7. 5	第3回ピコ秒現象国際会議, 第12回量子エレクトロニクス国際会議出席及び分子物理学に関する研究連絡のため
物理	助教授	堀田 凱樹	ギリシヤ	6. 19~6. 29	「ショウジョウバエの分子生物学と発生生物学」国際会議出席のため
物理	教授	有馬 朗人	ギリシヤ	6. 24~7. 6	1982年度原子核物理学に関するヨーロッパ物理研究会議出席のため
地物	助手	栗田 敬	アメリカ合衆国	6. 5~6. 20	「地殻の変形におよぼす水の化学的性質」ワークショップ出席及び固体地球物理に関する研究連絡のため
物理	助教授	折戸 周治	ドイツ連邦共和国	6. 27~7. 17	国際協同実験—電子・陽電子衝突実験のため
物理	助手	清水 清孝	アメリカ合衆国	6. 24~7. 10	日米科学協力事業「電子及びパイ中間子と原子核との相互作用」の共同研究実施のため
物理	助教授	江口 徹	アメリカ合衆国	6. 21~7. 17	高エネルギー理論物理学の研究のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助教授	若林健之	連合王国, デンマーク	6.10～6.17	生体膜シンポジウム出席及び生物物理に関する研究連絡のため
物理	助教授	矢崎紘一	アメリカ合衆国	6.15～8.16	「電子およびパイ中間子と原子核との相互作用」の共同研究実施, 「核物理におけるQCDとクォークの役割」研究会出席及び原子核理論に関する研究連絡のため
物理	助教授	釜江常好	アメリカ合衆国	6.22～6.27	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験のため
物理	助教授	若林健之	アメリカ合衆国	6.22～7.1	日米セミナー「骨格筋の収縮動力学と収縮の分子的機構」出席及び筋肉構造研究法の研究のため
動物	助手	加藤邦彦	カナダ, アメリカ合衆国	6.26～7.9	第10回アメリカ光生物学会年会出席及び研究連絡のため
植物	教授	古谷雅樹	カナダ	6.26～7.2	第10回アメリカ光生物学会年会出席のため
地質	教授	久城育夫	アメリカ合衆国, カナダ	6.25～8.10	岩石学の研究及び合同海洋学会議出席のため

\*\*\*\*\*  
 ◎泥棒がねらっている（盗難注意）！

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒（盗難）の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

昭和57年度科学研究費補助金理学部採択件数一覧

研究種目	申請件数	採 択 件 数		
		新 規	継 続	計
がん特別研究(1)	2	1		1
がん特別研究(2)	2			
自然災害特別研究(1)	2	1	1	2
自然災害特別研究(2)				
環境科学特別研究(1)	2	2		2
環境科学特別研究(2)	3			
エネルギー特別研究(1) (エネルギー)				
エネルギー特別研究(2) (エネルギー)	1			
エネルギー特別研究(1) (核融合)	1	1		1
エネルギー特別研究(2) (核融合)				
特 定 研 究(1)	11	10		10
特 定 研 究(2)	20	7		7
総 合 研 究(A)	26	5	13	18
総 合 研 究(B)	7	2		2
一 般 研 究(A)	14	4	2	6
一 般 研 究(B)	52	10	11	21
一 般 研 究(C)	99	29	10	39
奨 励 研 究(A)	50	30		30
試 験 研 究(1)	2			
試 験 研 究(2)	21	5	3	8
合 計	315	107	40	147

## 昭和57年度「防災週間」の実施について

すでに、ご承知のとおり、さきの閣議了解（昭57.5.11）により、このたび「防災の日」及び「防災週間」が設定され、これを受けて中央防災会議（昭57.5.27）において「昭和57年度「防災週間」の実施について」が決定されました。大要は次のとおりである。

- 広く国民が台風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波等の災害についての認識を深めるとともに、これに対する備えを充実強化することにより、災害の未然防止と被害の軽減に資するため「防災の日」及び「防災週間」を設ける。
- 「防災の日」は毎年9月1日とし、この日を含む1週間を「防災週間」（本年度は8月30日（月）

から9月5日（日）まで）とする。

- この週間において、防災知識の普及のための諸行事（講演会、展示会等の開催、防災訓練の実施等々）を各種関係団体の緊密な協力を得て全国的に実施する。

- 既存の防災に係る各種訓練等の関係行事と、有機的関連を保持しつつ相互に効率を上げるよう配慮する。

〔実施の重点〕・震災対策・風水害対策・特定事業所等の防災対策

〔実施する行事等〕・防災意識の高揚及び防災知識の普及・防災訓練等・防災功労者の表彰 etc

## 理学部図書委員会要綱

昨年10月定例教授会において、理学部図書委員会が設置され、同委員会要綱は次のとおりである。

については、学部図書行政はもとより、教職員ならびに学生の教育研究の向上発展により一層の期待がもたれよう。

（任 務）

1. 委員会は学部長の諮問に応じ、図書業務全般にわたる運営上の重要な事項について審議することを任務とする。

（組 織）

2. 委員は、図書室を有する教室等から各1名の教官・事務長及び学部長が必要と認める者若干名とする。

（任 期）

3. 委員の任期は、2年とする。ただし、再任は妨げず補欠の委員の任期は、前任者の残任期間

とする。

（委員長）

4. (1)委員長は、委員の互選による。副委員長は委員長の指名による。  
(2)委員長は、必要に応じ、委員会を招集し、その議長となる。  
(3)委員長に事故があるときは、副委員長が、その職務を代理する。

（議 事）

5. (1)委員会は、委員の3分の2以上の出席がなければ、会議を開き議決することができない。ただし、委任状（代理出席を含む）をもつてこれに充てることができる。  
(2)委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(小委員会)

6. (1)委員会は、特定の事項について審議するため、小委員会を設けることができる。

(2)小委員会の委員は、委員会の議を経て学部長が委嘱する。

(補 則)

7. この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は委員会の定めるところによる。

る。

附 則

1. この要綱は、昭和57年2月17日から適用する。
2. 第4項に定める委員長及び副委員長は、本学の図書行政商議会委員及びその代理となる。
3. 適用日に委員である者の任期は昭和59年3月31日までとする。

## 第18回教職員・学生懇親会

本学部恒例の教職員と学生の懇親ビヤパーティーが今年もさる5月10日(月)午後3時より、本学部附属(小石川)植物園で行われた。

さいわい好天に恵まれ、緑したたる園内には、名誉教授、教職員や学生およそ800名の参加があり、江上学部長、佐伯植物園長代理の挨拶と、渡

辺武男名誉教授の乾杯で、各々ビールとつまみを手にあちこちの樹の下に、芝生の上に、緑とビールを満喫しながら懇親の輪がいくつもつくられた。用意されたビールやジュースは好天も手伝って、予想以上にはやく飲み尽くされ、終始和やかに、賑やかなうちにも午後5時前散会した。



## 編 集 後 記

広報は従来殆ど依頼原稿のみから作られて来ましたので、今回投稿原稿を手にした時は正直に云って戸惑いました。結局、編集委員会としては、記事の内容は筆者に全責任を持っていただくということにして掲載することに致しました。

学会発行の学術雑誌に投稿された研究論文の採

否を回って引き起こされるトラブルに悩まされたという経験をお持ちの方は、雑誌編集に携った方の中に大勢いらっしゃると思います。今回の投書に対してご意見がございましたら編集委員会までお寄せ下さい。

(露 記)

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

---

編集:

飯 高 茂 (数学)	内線 4053
矢 崎 紘 一 (物理)	4123
松 野 太 郎 (地物)	4299
露 木 孝 彦 (化学)	4357
尾 本 恵 市 (人類)	4482

---